

特集 中東

深まる 日本との絆

長年にわたって情勢不安が続いてきた中東地域。
世界が平和を願うなかで、この地域と歴史的に負の関わりがなく、
政治的にも中立を維持してきた日本。
その協力は、好意的に受け入れられている。
JICAは、インフラ整備、環境、保健、教育、産業など
多岐にわたる分野での協力を推進して
毎日を力強く生きる人々を支援している。

信頼でつながる 中東と日本

資金を提供するだけでなく、
相手の立場にたって技術を伝え、人材を育てる――
この姿勢が日本人や日本企業への信頼を醸成し、
中東と日本は良好な関係を築き上げている。

パレスチナ
文化遺産を
地域の発展の一助に

文●光石達哉 写真●阿部雄介

案件名 ジェリコヒシャム宮殿遺跡大浴場保護シェルター建設及び展示計画
2018年1月～2020年5月

歴史的遺産を
両国でともに守る

パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区の町ジェリコは、紀元前1万年には人が住んでいたとされる世界最古の都市で、聖書にもたびたび登場する。8世紀にはイスラム王朝のウマイヤ朝が、この地にヒシャム宮殿を建設。初期イスラム建築の代表的な文化遺産で、単体では中東最大級といわれる大



建設現場では日本人とパレスチナ人合わせて約25人が働く。現場では日本のように標識の掲示なども徹底している。安全文化を輸出・定着させることも重要なミッションだ。



浴場のモザイク床が当時の栄華を今に伝える。

しかし、以前はこのモザイク床は保護のため砂や布がかけられていて鑑賞できず、そのため観光客が許可なく砂を掘り起こして傷つけるおそれもあった。そこで、モザイク床を保護しつつ観光客が鑑賞できるようにするドーム型シェルターの建設を、JICAが支援している。シェルター内にはモ

ザイク床を見下ろすための観賞用通路を張り巡らせる予定で、今年5月の完成を目指して工事が進められている。

シェルターの設計・施工管理を受託したマツダコンサルタンツの高木政一さんは「パレスチナ観光遺跡庁は自分たちの意見を聞いてくれる協力相手を求めている、私たちはその点でいい関係を築けていると思います」と話す。「たと

パレスチナ イスラエル ヨルダン

地域の観光業を後押し

日本政府は、「平和と繁栄の回廊」構想の一環としてパレスチナ、イスラエル、ヨルダンの観光業を促進する取り組みを行っており、ヒシャム宮殿でのプロジェクトもそのひとつ。JICAは2019年に、外務省と日本旅行業協会との共催で日本の旅行業者向けにパレスチナをPRするセミナーとツアーを開催した。今年は、この地域を周遊するツアー企画などを行うプロジェクトも始まる。



ヨルダンの円形劇場

こちらはヨルダンの首都アンマン。手前は6,000人収容できるローマ時代の円形劇場で、奥の丘の上にはアンマン城が見える。



バンクシーのアート

覆面芸術家バンクシーが手がけた、ベツレヘムにあるホテル「ザ・ウォールド・オフ・ホテル」。ホテル内や街中ではバンクシーのアート作品が鑑賞できる。



キリスト生誕の地

ベツレヘムの生誕教会。教会の地下の祭壇にはイエス・キリストが誕生した場所を示すとされる星形の印がある。



誘惑の山

イエス・キリストが40日間の断食苦行を行ったとされるジェリコの「悪魔に試みられた誘惑の山」。切り立った崖肌に修道院があり、観光名所のひとつとなっている。



モザイク床は面積825平方メートル。モザイク床鑑賞用のドーム型シェルターを建設中。

シェルター建設中のため、モザイク床をカバーで保護しています

床のカバーをはがすと



ドーム型シェルターの外観

シェルターは55×45mの大きさで、高さは約13m。



8世紀のイスラム王朝の大浴場の遺跡が!

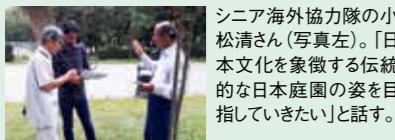
工事前に披露されたモザイク床。広大なスペースは入浴後にくつろいだり歓談したりするスペースだったといわれている。

Column

イランに日本庭園を



庭園はイラン北西部のラシュト市に造られる。日本と気候が似ている、植生も日本庭園に適するものが多くあるという。

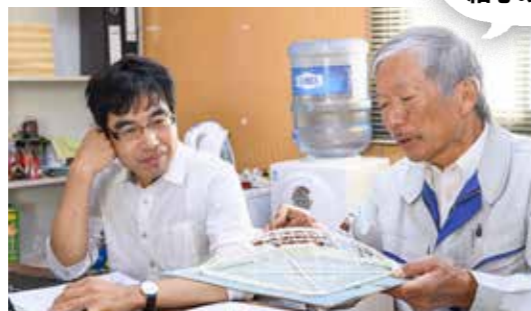


中東地域のなかでもイランと日本の外交関係は長く、昨年90周年を迎えた。その記念にイランは、両国の友好的シンボルとして日本庭園の造園を要望。シニア海外協力隊の小松清さんが現地の設計担当者にアドバイスをを行い、完成後の維持管理に必要なマニュアルや樹木カードなどの作成を進めた。市民の憩いの場、そして観光の目玉となる日本庭園がイランで新たに誕生しようとしている。



上はシェルターの模型と設計図。下はモザイク床。

大切な遺跡。細心の注意で



マツダコンサルタンツ 賀上眞久(かがみまさひさ)さん(右)

「遺跡を傷つけないように、地面から30cm以上掘る場合は観光遺跡庁の了解を得る必要があります。実際に陶器の破片などが出てきたりしましたが、その場合は工事を止めて観光遺跡庁の指示をおおき、慎重に進めています」

高木政一(たかぎまさかず)さん(左)

「シェルターが完成した後は、モザイク床や遺跡自体の修復という作業が必要になってきます。それも観光遺跡庁は引き続き日本に協力してもらいたいという意向を示しているので、今までの仕事が評価されているのかなと思います」



パレスチナ観光遺跡庁 ジェリコ支所長 イヤッド・ハムダンさん

「パレスチナには昨年、約200万人の観光客が訪れました。日本からは、観光振興のため過去10年間、さまざまな研修やワークショップの開催、市内の観光案内所等の施設設備の協力を得ています。今後も未整備の遺跡の修復を進めて、観光客がもっと長期滞在できる街づくりを目指します」

「JICAの仕事をしているのか？」と、市民から親しく声をかけられることもあります。このプロジェクトについても信頼や期待を感じます」と賀上さん。
日本の誠実な取り組みが、パレスチナの人々にも認められ、実を結ぼうとしている。

「JICAの仕事をしているのか？」と、市民から親しく声をかけられることもあります。このプロジェクトについても信頼や期待を感じます」と賀上さん。
また、パレスチナにはほかにイエス・キリスト生誕の地など豊富な観光資源がある。紛争のイメージが強いことや観光に関するノウハウの不足により観光産業が停滞していたことから、JICAは2008～16年に観光振興の支援も実施。観光案内所の設置や住民とお土産品の開発などに取り組んできた。
「この地の地中にはまだ遺跡が埋まっている可能性があるのだから、設計のときには、現地の考古学者や大学の先生、国連教育科学文化機関(UNESCO)、建築家などを招いて、3度にわたる有識者協議会を開き、遺跡保存や観光資源活用、景観への影響などの視点でさまざまな意見を取り入れながら進めました」と語るように、計画では現地の意見が尊重された。同社の常駐監理者、賀上眞久さんは「この地の地中にはまだ遺跡が埋まっている可能性があるのだから、設計の基礎を採用して、建物の強度は基礎同士をつなぐことで確保しています」と遺跡を傷つけない工夫を語った。



改修前



「改修前はまるでヤカンのように排ガスが漏れていた」と山口さん。発電能力は定格出力の50～60%にしか満たなかった。

改修後

発電能力が定格出力の200メガワットに回復。日本の100万世帯分の電力に相当する。

イラク



積み重ねた実績が信頼を生む日本企業

案件名 ハルサ発電所改修事業
借入契約署名：2015年2月、2017年8月（フェーズ2）

イラク南部の最大都市バスラには、1982年に日本の協力で建てられたハルサ発電所がある。この地域一帯の電力供給をまかなう重要な施設で、運用や維持管理は日本人技術者から学んだイラク人技術者が行っていた。しかし湾岸戦争による損害を受けた後、老朽化も進み、経済制裁の影響による資材不足のためメンテナンスも十分でなく、発電能力が低下していた。この現状の解消にイラクは、2015年からJICAの協力を得て発電所内の四つの発電設備のうち4号機の改修を実施（17年に終了）。現在は1号機の改修を進めている。

地域一帯の電力供給を日本企業の手で



改修後の初稼動ではイラク人も日本人も大きな拍手とともに沸いた。

「4号機では建屋の屋台骨など残せそうなものは残しつつ、発電の要となる部品はほぼ交換しました。イラク人溶接士や機械工を日本に招いて技術トレーニングを行い、現地では保守・運転のための技術教育を行っています」と話すのは、プロジェクトを担当する三菱日立パワーシステムズの山口雅義さん。電力の安定供給のために導入した電子制御システムは、扱いやすいと現場でも好評だ。近隣の工科大学から学生の研修を受け入れ、日本の最新技術を学ぶ場も提供した。作業中には税関や国内で大きな資材の運搬が止められることもあったが、その都度スタッフが一丸となって遅れを巻き返した。納期通りの完成にはイラク人関係者から多くの感謝の声が上がった。



三菱日立パワーシステムズ 長崎サービス部 山口雅義 (やまぐちまさよし)さん(左)

2015年から改修事業を担当。「イラク電力省の関係者や現地職人とよく食事と一緒に汗を流すスタッフもいます」。長年、仕事をしてきたマフムド・アブドゥルラザック・イブラヒムさんと。

エジプト



確かな絆で歴史を守る

文・光石達哉 写真・阿部雄介



貴重な経験を将来に活かしてください

案件名

大エジプト博物館 保存修復センタープロジェクト
2008年6月～2016年3月
大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト
2016年11月～2021年3月

保存修復プロジェクト副総括 西坂 朗子 (にしざかあきこ)さん

「博物館は200年、300年とその国の人たちが大切にしているもの。そこに日本人が貢献できたのは大きなことだと思います。ここではエジプトの貴重な文化財が来場者に親しみやすいかたちで展示されるので、今までとまったく違う経験をしてもらえるのが楽しみです」



今年中の開館を目指す大エジプト博物館。中央の入り口から左側が展示スペースで、右側には国際会議場、シアター、フードコートなど公共施設が入る。



エジプト古王国時代(紀元前2686年～紀元前2185年ごろ)のイニ・スネフェル・イシェテフ壁画の修復作業。壁画を傷つけないように泥や汚れを取り除いていく。



文化財の保存修復とともに作業し技術を伝える

ギザの三大ピラミッドのすぐそばで、古代エジプトの文化財10万点を収蔵し、5万点展示する大エジプト博物館の建設が、日本の協力で今年中の開館を目指して進められている。

その一角にある大エジプト博物館保存修復センターでも、日本人が活躍している。JICAが実施した同センターの人材育成を行うプロジェクトでは、100回以上の研修に約2250人が参加した。

研修終了後、2016年から日本人とエジプト人が合同で文化財の保存修復を行うプロジェクトが始まった。特に貴重な文化財の修復と一緒にいながら、その技術を現地スタッフに伝えている。ツタンカーメン王の衣服などを扱う染織品部門のリーダー、モハメッド・アヤドさんは「修復と同時に分析、記録をとる作業も大事です。日本の協力なしで今のレベルの修復は実現できなかった」と感謝する。



大エジプト博物館 保存修復センター 保存修復担当 所長 フセイン・カマルさん

「日本人とは2008年から一緒に仕事をして多くのことを学びました。その中で一番重要なのは、しっかり計画を立てること。最初、エジプト人には早く作業を終わらせたい気持ちがありましたが、プロジェクトを通して迅速性と計画性をバランスよくしっかりできるようになりました」

プロジェクト副総括の西坂朗子さんは「修復の技術自体は日本独自のものではなく、国際標準のもので。しかし、コンピューターやX線などいろんな分野の専門家が一緒に学際的に取り組むチームワークは日本の強みで、今後エジプトでも続けてもらいたいと思って伝えていきます」と語る。

間もなく開館する博物館で展示される貴重な文化財の陰には、日本とエジプトの長年にわたる協力と絆がある。

高さ約11mのラムセス2世像。1820年にメンフィスで発見され、直近ではカイロ市内で約50年展示された後、2018年1月に同博物館入り口に置かれた。



Column

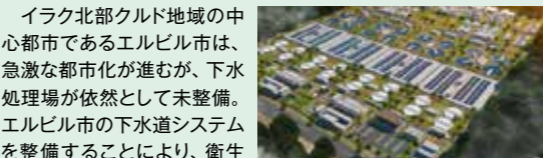
イラク 進む! 日本のインフラ整備

イラクは度重なる戦争、イスラム国 (ISIL) の侵攻などにより、老朽化するインフラ施設の更新が進んでいない。JICAは日本の技術を役立てる本邦技術活用条件 (STEP) を適用した協力にも取り組んでいる。



案件名 バスラ製油所改修事業
借入契約署名:2012年10月(第一期)、2019年6月(第二期)

老朽化や戦争によって製油所の設備能力が低下し、産油国にもかかわらず石油製品を他国から輸入するイラク。南部のバスラ製油所の改修を行い、現代の環境基準に適合する高品質な国産石油製品を増産させ、経済復興を後押しする。



案件名 クルド地域下水処理施設建設事業(I)
借入契約署名:2015年6月

イラク北部クルド地域の中心都市であるエルビル市は、急激な都市化が進むが、下水処理場が依然として未整備。エルビル市の下水道システムを整備することにより、衛生環境の改善を図る。

イラク事業の動画を JICA YouTube ページで公開中!

<https://youtu.be/hv8yBrzMOTY>

